
優しいその手を離したら・・・

霜月 梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しいその手を離したら・・・

【Nコード】

N0410J

【作者名】

霜月 梅

【あらすじ】

3年前に別れ、再会した恋人には妻が居た。

相手の幸せを願って居たはずなのに、自分でもどうしようも出来ない感情が、未央の中に芽生える。

もう一度始まった二人の物語の行き着く先は・・・。
もう二度とその手を離したくは無い。

一話：再会

駅構内にあるショッピングセンターのお気に入りのお店の雑貨屋で、買ったばかりのマグカップを思わず落としてしまいそうになった。

「み、幹生？」

「未央か？」

3年ぶりに昔の男と再会しただけで、こんなに漫画の様な反応をしてしまうほど、動揺するものなのか？

まあ、幹生はただの昔の男ではない、お互いに結婚を意識し10年近く付き合っていた男だった。

「元氣？少し痩せたみたい」

私は見栄が動揺しているのを気が付かれるのが嫌で、努めて平静を装った。

「ああ元氣だよ。痩せたのはもういい歳だから、体調管理の為だよ。未央こそ元氣か？」

3年前と変わらない私の好きな低い暖かい声が、昔の口調のまま自然と私の耳に入っていく。

「元氣よ。幹生あまり食べないのに変な時間に食事摂るものだから、がっしりと肥えてたものね。今くらいが調度良いわ」

少し痩せた彼は悔しいくらい格好の良い男になっていた。

3つ歳を重ねた私は彼の目にどう映っているのだろう。

「幹生ー」

少し離れた場所から、柔らかいウェーブがかった髪を揺らし、一人の女性が駆け寄ってきた。

子犬のように幹生に纏わり付きながら、視線を私へと移す。

「お知り合い？」

その女は上目使いで幹生に問いかけた。

「ああ、前の会社の同僚だよ。木月未央さん」

柔らかい包み込むような私にも見覚えのある優しい視線をその女に向けながら、幹生は応えた。

「俺の妻だよ」

彼女には分からないように私に申し訳無さそうな表情をしながら、幹生は私に彼女を紹介した。

「いつも主人がお世話になっております」

幹生と10歳は年が離れていると思われる彼女のその台詞はままたの様に違和感を感じさせた。

「あら、こんな可愛い奥さんをもらって、野崎さんも隅に置けないですねー」

私は肘で幹生を小突くようにおどけて見せた。

何故か自分でも戸惑うほど胸が痛んだ。

・・・会社で話していたように名字と敬語で話をさせないでよ。
別れる時、結婚はしないって言ったのに嘘つき。

何より柔らかい包み込むようなあの目で、その人を見ないでよ。
その目は私に向けられたものだったのに・・・。

もう、すっかり過去のものと割り切って過ごしていた筈なのに・・・。

本当に愛して一所懸命に愛して人を愛するということは、こういう事なんだと初めて分かることが出来た人だった。

付き合っている間、これ程無い位大切にしてくれて、別れる時は私のことを思ってたその温かな大きな手を離してくれた。

別れる時、憎むことや恨む事など一つも無かった。『ありがとう』の一言しかなかった。

私達は好きなまま、好きだけではどうすることも出来ない理由で別れた。

だからこそ、彼の幸せを願っていたのに・・・。

何故、幸せそうな彼を見てこんなに胸が痛むんだろう。

何故、エゴイズムな感情しか浮かばないんだろう。

「じゃあ、私はこの辺で失礼します。野崎さんお元気そうで良かったです」

一言笑顔でそう言うのがやっとだった。

こんな自分が嫌で仕方なく、私はその場から早く立ち去りたかった。

一話：再会（後書き）

久しぶりに書き始めました。

以前よりも多忙なので、更新は遅いと思いますが、今まで通り完結はさせますので、良かったら読んでください。

二話：初デート

「もし、良かったら今度二人で食事に行かない？」

野崎さんの突然の申し出に私は箸で摘んでいた揚げ出し豆腐を落としそうになった。

「へっ!？」

「いやーみんなと食べるのも楽しいんだけど、木月さんと二人で行ってみたいなあと思ってさ」

その温厚な性格がにじみ出るような優しい笑顔を浮かべながら、彼は恥ずかしそうに私を誘った。

ポーカーフェイスな野崎さんが今まで見せたことの無い、その恥ずかしそうな笑顔に私は魅かれ、気が付くと頷いていた。

連れ立ってトイレに行っていた同僚の二人が戻ってくると、野崎さんは何事も無かったかのように、二人を軽いジョークで迎えた。

私は先ほど箸を滑り落ちた揚げ出し豆腐を口に運びながら、内心ドキドキと早くなる鼓動に戸惑っていた。

その食事から二週間後の休日、前日にドライブをしてから食事に行こうと野崎さんから連絡が入り、これは完璧にデートというヤツでは・・・と鈍い私もはっきりと気が付き、いつもよりもファッションもメイクにも力を入れた。

随分と恋愛から遠ざかっていた私は、野崎さんにときめいていると言うより、久々のデートというものにときめいていた。

はっきり言って、野崎さんを一人の男性として意識したことは無かった。

勿論、温厚で気が利く彼の性格は人間としては好意を持っていたが、それ以上の感情は誘われた時の笑顔を見るまで全くと言って良いほど無かった。

ポーカーフエイスの彼のあの恥ずかしそうな笑顔を見なければ、適当にはぐらかし二人で食事に行くことは無かったと思う。

彼から近くに着いたという連絡が入り、家を出るとマンションの前に青色のミニクーパーの中に大きな身体を窮屈そうにしている彼の姿が見えた。

「お待ちせしました」

ドアを開け助手席に座ると小さな車の中で彼は更に狭そうな感じになってしまい、私は少し申し訳なく感じた。

彼は同僚とはいえ、年齢が2歳上で私は仕事の時もプライベートの時も敬語で話していた。

「木月さんと一緒に行きたい場所が有ってね。食事の前にドライブがてらそこに行っても良いかな？」

「あまり遅くはなれないので、遠くだと困りますがそうでないならお任せします」

私の家は父が出張の多い多忙な人でほとんど家には居らず、母と二人暮らしのような感じで、病弱な母を一人で置いて遅くまで出かけるのは気が引けるのだった。

その辺の事情を知っている彼がそこまで遠くに行くとは思えなかったが、一応の念押しだった。

「お母さんのことが気になるんでしょ？大丈夫だよ。そこはちゃんと分かってるから」

案の定、彼は遅くはなれないことを分かってくれていた。

彼が車を一時間程走らせ着いた私と行きかった場所は、朱色の鳥居や大きな拝殿が有るような派手な神社では無く、石作りの鳥居のある地味では有るけれど木々に囲まれた落ち着いた厳かな雰囲気的神社だった。

私が神社仏閣が好きなことも、特にその中でも私が好きそうな雰囲気まで彼は把握していた。

二人で本殿をお参りした後、木々に囲まれた摂末社を散策しながらお参りする。

私は充実していて楽しいけれど、彼は楽しいのかが気になり私は時々彼の横顔を見ていた。

彼は車を自宅の車庫に停めると食事の場所へと案内してくれた。

そのお店は私が以前から行きたいと言っていたお店で、彼の家の近

くにそのお店が有ることと、
そのことまで覚えていた彼の細やかさに驚いていた。

少しの石畳を歩き引き戸を開けると、和服姿の店員が迎え入れ座敷へと案内してくれた。

その店は個室になっており、創作料理をコースで頼むようなスタイルになっている。

彼は酒を飲むとあまり食べない私のそんなとこまで気にしていて、一番料理の数の少ないコースを予約していた。

細やか過ぎる、気が利く・・・やばい・・・私はこういう男に弱い。

よく恋はするものではなく落ちるものだと言う。

確実に彼に落ちてしまっている自分に私は気が付いていた。

二話：初デート（後書き）

やはりやりの遅めの更新です。

出来れば1ヶ月に2度は更新したいのですが・・・
なかなか難しいです（TT）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0410j/>

優しいその手を離したら・・・

2011年1月28日01時01分発行